Vol．68－No．07　　2017 年 2 月

阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

１月例会（１月２２日開催）報告

～　公同書簡「ユダの手紙」講解　～

江原有輝子先生

２ 月に入りました。今年は年初から天候不順の日が続き、風邪など体調を崩しておられる会員の方々が多いようです。くれぐれも健康にはご留意ください。

信友会では、２０１６年度は、「あまり説教では触れられる事のない聖書箇所を学ぶシリーズ」を企画、昨年４月の第１回「テトスへの手紙」にはじまり、第２回「フィレモンへの手紙」、第３回「ヤコブの手紙」と進めてきました。１月の例会では、シリーズの最終回として「ユダの手紙」を取りあげ、江原有輝子先生に丁寧な聖書講解をしていただきました。例会でのお話をもとに、質疑応答やその後の解説等も加えた内容となっています。普段あまり読まれることのない「ユダの手紙」、この機会に是非ご一読ください。

例会報告：　聖書研究

新約聖書　「ユダの手紙」　江原有輝子

1.　「ユダの手紙」の位置づけ

今回の信友会例会では新約聖書の「ユダの手紙」の手紙を皆で読んだ。現在信友会では、普段あまり読まれることのない書物を皆で読むことにしているが、今回は「ユダの手紙」であった。ユダの手紙は、英語圏における聖書日課には取り上げられていないそうで、一般信徒に読まれることが少ない書物である。さらに、この書物が聖書の中に正典として入れられる過程においても、その正典性について議論があったという。まず、「公同書簡」と呼ばれる 1－2 ペトロ、ヤコブ、ユダ、ヨハネ 1-3 の手紙について、4 世紀の終わりごろまで、正典であるか否かについて論争があった。さらに、ルターは、ヘブライ・ヤコブ・ユダ・黙示録が新約聖書の他の文書よりも真実と確かさに欠けると考えたと言われている。また、新約聖書ティンダル版は、疑いのある 4 著作（ヘブ・ヤコブ・ユダ・黙示）を新約聖書の他文書と区別した。今日ではこれらの文書はキリスト教の正典に属しているが、多くの人はこれらが「2 級」であると感じており、これらの文書は「周辺的」である。

2.「ユダの手紙」の著者

この手紙の作者は自分について「イエス・キリストの僕で、ヤコブの兄弟であるユダ」と名乗っている。我々はユダというとすぐに主イエスを裏切ったイスカリオテのユダを思い浮かべるが、当時ユダという名前はごく一般的なもので、新約聖書にも幾人ものユダが登場する。それらは、イエスの兄弟ユダ・12 使徒の中のヤコブの子ユダ・バルサバと呼ばれるユダ・ダマスコに住んでいたユダ・イスカリオテのユダなどである。一方ヤコブについても、イエスの兄弟ヤコブ、ーこの人は原始エルサレム教団の指導者で「義人」と呼ばれるほど律法遵守に忠実な人でユダヤ人反乱の後、石打ち刑で殉教したー、12 使徒の中のゼベダイの子ヤコブ、アルファイの子ヤコブ、小ヤコブ、使徒ユダの父、ヤコブ書の著者などがあげられる。手紙の著者は、イエスの兄弟ヤコブの兄弟ユダと自称している。注解書は、これが本当であるとするものと、これは、手紙の権威を高めるために著者が使用した名前であるとするものがある。

この手紙に見られるいくつかの特徴は、パレスチナのユダヤ人キリスト教に起源があることを示唆すると言われている。また、ユダは、新約諸文書の大抵の著者たちとは異なって、七十人訳ギリシア語旧約聖書ではなく、ヘブライ語旧約聖書を使用しているという。

ユダの手紙は、ペトロの手紙 2 と、主題・用語・語句の配列・理念など非常によく似ている。ユダの手紙 4-16, 17-18 節は、2 ペト 2:1-18, 3:2-3 の並行記事である。

3. 偽教師についての警告

この手紙の目的は、偽りの教えと不道徳な生活態度とによってこの手紙の読者たちに危険なものとみなされる一群の人々について、読者に警告を与えることである。

内容は、1-2 節が初めのあいさつ、24-25 節が終わりのあいさつで、3-23 節が本文である。

本文中前半の 3-16 節で、ユダは偽教師についての警告を与えている。そこでは「過った教えに抵抗しなさい」と呼び掛け、次いで「神は不信仰な人々を滅ぼすことを思い出せ」と言って、その例を挙げる。

ここで、ユダの手紙で引用されている様々な例の中には旧約聖書に記述されていないものがあるとの質問が出た。そこで、ユダの手紙には現在「外典・偽典」と呼ばれている書物、特に「エチオピア語エノク書」からの引用が複数あることを指摘し、これらの書物についての説明を行った。現在我々が使用している聖書は、プロテスタントとカトリックでは「正典」とされている書物の数が異なっている。ローマ・カトリック教会では、「トビト記、ユディト記、エステル記（ギリシア語）、マカバイ記、知恵の書、シラ書、バルク書、エレミヤの手紙、ダニエル書補遺」を「第二正典」としてミサの中でも読むが、プロテスタントの諸教会ではこれらの書物を礼拝の中で読むことはなく、新共同訳聖書では「続編」と呼んでいる。聖書の「正典」が定められると、正典ではないも

のを「外典」「偽典」として区別するようになったが、それらの書物も引き続き読まれていたと考えられ、皆が当然知っていることとして手紙の中に引用されたのである。当時堕落した天使の話は大変人気があり、そのことをユダの手紙の著者は「エチオピア語エノク書」から引用したと言われている。

9 節に書かれている「大天使ミカエルがモーセの遺体のことで悪魔と争った」というエピソードも、聖書からではなく、これは断片的に残っている『モーセの遺訓』という書物によるものである。それによると、モーセが埋葬に値するかどうかをめぐってミカエルとサタンの間に論争が起きたことを示す。サタンはモーセがかつて一人の男を殺したゆえに、天使たちによって埋葬される名誉に値しないと主張し、それに対してミカエルは「主がお前を懲らしめてくださるように」と語った。ユダはこれによって大天使でさえ神の裁きを自分自身で執行する権威を持たなかったことを示している。

神に反逆した人々が罪に定められる例に次いで、12－13 節では混乱した自然現象が次々に示される。ここで 「神が反逆した人々を罪に定める」例として「金もうけのためにバラムの迷いに陥り」とされているバラムは、旧約聖書の民数記によれば、金を積んでイスラエルの民を呪えを言われてもそれに屈さなかった人である。なのになぜ悪い者の例とされているのかとの質問が出たが、その場では答えが得られなかった。これについて調べたところ、民間伝承では、「バラムは預言を最も高い買い値を付けた人に売ったが、口を利くロバほどにも予見できなかった」とされているそうで、バラムを強欲な人とする見方は、民間伝承によるものと思われる。

ユダは 14-16 節で、これらすべての出来事が古い時代に預言されていたという事実を論証しようとする。偽教師たちは神の律法を全く尊重しない。彼らは共同体を堕落させ、彼ら自身の欲望に従う者と示される。

4. 警告と励まし

本文後半の 17-23 節では、警告と励ましが与えられる。17 節でユダは人々に「使徒たちの警告を思い出しなさい。」と呼び掛けて、読者を彼ら自身の経験に連れ戻す。その人々は今栄えているように見えるが、邪悪な人々が終わりの日に優勢になるという考えは、ユダヤ教とキリスト教の黙示文学の両方に共通した特徴である。栄えていても彼らは物質的な人々で、霊を持たない者であり、その点において動物と同じである。

ユダは、信仰深いキリスト者のふるまいを敵対者たちのふるまいと対抗させ、20-23 節で「あなた方の信仰を強くしなさい。」と呼び掛ける。共同体を強めるための勧告は、初期の教理問答の教えに由来すると考えられている。相互の高め合いは、初期キリスト教共同体に共通の特徴であった。手紙全体を通して述べられる汚れについての絶え間ない警告は、読者が彼らの共同体の聖を高めるために積極的な役割を担うべきであることを示す。

彼らは、誤った教えや利己的あるいは不道徳なふるまいを不問に付したままにしてはならない。
この手紙は、至る所で集会に侵入を企て、より高次の知識を持っていると誇称しつつ実はキリスト教の教えと道徳生活を脅かしていたある種の運動に対抗して、生まれてなお日の浅いキリスト教を守り、これを確立しようとした防衛の戦いに参加せよとの呼びかけである。

5. 教会生活の心得

教会に似て非なる教えが入り込むことは今日でも珍しいことではない。私たちはどのようにしたら正しい教えと間違った教えを見分けることができるのか。そこで、名刀と偽物を見分ける目を養うためには、ひたすら名刀を見ることであると言う見分け方訓練の例が出された。毎週礼拝に出て正しい教えをしっかりと聞き続ければ、過った教えが出てきたときにすぐに見分けられるようになるはずである。
その後、キリスト教的知識を頭に詰め込んで絡む人はどうしたらいいのかとの質問があった。相手をやり込めるためにキリスト教的雑学をいくら身に着けてもその人は救われない。キリストに捉えられてその信仰の「おいしい味」を味わっている人間にとっては、知識だけのキリスト教はまずい料理を食べているのと似ている。どの人にもおいしい料理を味わってもらいたいと願い、伝道に励みたい。